歩く男と待つ女

――森鷗外「雁」論――

中村　怜子

はじめに

森鷗外「雁」は明治四十四（一九一一）年九月から大正二（一九一三）年五月まで「スバル」に連載され、その後大正四（一九一五）年五月に結末部三章が書き加えられて単行本『雁』として籾山書店から刊行された。「雁」には、さまざまな対立構造が潜在しているが、それらの対立は「雁」の語りの形式と結びつけて論じられることが多い。テクストに「物語の一半は、親しく岡田に交わってゐて見たのだが、他の一半は岡田が去った後に、図らずもお玉と相識になって聞いたのである」、「前に見たことと後に聞いた事とを、照らし合せて作った」とあるように、「雁」は「僕」が自身の体験とお玉から聞いた話とを合わせて語る物語である。千田洋幸は、〈僕〉の語るのは「医科大生である岡田や〈僕〉が生きる〈青春〉の内部世界＝明治社会の上層」、全知の語り手が語るのは「末造・お常・お玉らが生きる〈青春〉の外部世界＝明治社会の下層」であり、語りによってテクスト内の世界が対比されていると指摘している（1）。この例に見えるように、テクスト世界に対立構造を見出す論の多くは、岡田や「僕」という医学生の世界と、お玉や末造、お常といった庶民の世界を相対するものとして捉えている。

このような傾向は、テクスト空間に着目した先行研究においても同様である。前田愛は末造・お常夫婦、お玉父娘の暮らす空間を「下町の淀んだ世界」とし、散歩の道筋に見える「下町」を「ただ風景としてやりすごす明治のエリートたち、「僕」や岡田の世界」と対照させている（2）。瀧本和成は「東京大学に象徴されるエリートや知的富裕階層の人々が住む山手側」と「職人、車夫、工場労働者、行商、大道芸人等が多く住む下手側、つまり下町界隈」が無縁坂を境として対比されていると述べる（3）。これらの論は、岡田や「僕」の世界とお玉や末造・お常の世界を空間の観点から二項対立的に捉えたものである。

ただし、こうした「山の手」と「下町」の二項対立的な視点とは異なるテクスト空間の分析も、少数ではあるが行われている。山崎一穎は、お玉父娘の最初に住んでいた練塀町を「未開化の世界」として「帝国大学を中心とする開化された世界」と比較している（4）。また、長谷川明子は末造の活動範囲に目を向けている。末造は「下町から山の手、さらには横浜、千葉と、それこそ縦横無尽に」移動しており、「本郷界隈で活動する岡田」の活動範囲は「末造の活動範囲に全く内包されている」と指摘し、開化の波の中で自らの欲望を追求し、逞しく生きる末造像を見出すものである（5）。

「雁」には、土地や場所の名が具体的に記されている。各種全集の中には、不忍池周辺の地図を付し、登場する場所を解説しているものもあるが（6）、これも詳細な地名の記述あってこそ可能になる試みである（7）。

本稿では、具体的な地名の記述に着目して物語内の空間構造を分析することで、新たなテクスト読解の可能性を模索したい。

一　「近代」の歩く男たち

テクスト内の舞台となっている空間について分析を進める前に、時間設定を確認しておきたい。冒頭の「古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云ふことを記憶してゐる」等の記述から、テクストは「僕」が明治十三（一八八〇）年の出来事を振り返って記したものである。物語は「九月頃」に岡田とお玉が出会ってからの約三か月間を軸に、お玉が無縁坂に越すまでの経緯や、末造とお常の物語が挟み込まれる形で進む。

東京大学の医学生である岡田は、時間に従って規

則正しく生活し、下宿「上条」の「標準的下宿人」として周囲から評価されている。岡田には決まった散歩コースがあり、「外の道筋はめったに歩かない」。岡田とお玉は、彼のこの規則正しい習慣のために出会う事になる。

東京大学が創立されたのは、明治十年のことである（8）。本郷の地に設けられたキャンパスは、いわゆる「山の手」と呼ばれる地域に属する（9）。物語当時の明治十三年は、本郷が文教地域として形成されていく最初期であったと言える。岡田や「僕」という日本の近代大学制度が開始された当初の東大生は、文教の地・本郷におけるエリートそのものであった。

さて、岡田の散歩の道筋は、テクスト内に以下のように示されている。詳しくは、図を参照していただきたい（地名に付した数字は、図中の番号と対応している）。

（Ⅰ）-A

上条②→無縁坂③→不忍池④の北側→上野の山→広小路→仲町→湯島天神⑪社内→臭橘寺⑩の角→上条②

（Ⅰ）-B

（仲町までは（Ⅰ）-Aと同じ）→（右に折れる）→無縁坂③→上条②

（Ⅱ）

上条②→長屋門→大学構内①→赤門→本郷通り→粟餅屋→神田明神境内⑫→眼鏡橋⑬→柳原の片側町⑮→お成道→（狭い西側の横丁のいずれか）→臭橘寺⑩→上条②

岡田は、この散歩の途中には「ちよいちよい古本屋の店を覗いて歩く位のもの」だという。「文学趣味」があるエリート・岡田の、学問に向かう姿が伺われる描写である。また湯島天神の「社内」、神田明神の「境内」に入ることが明記されている点も注目に値する。湯島天神と神田明神は、どちらも人々の生活の場よりも高台にある。両神社への訪問は、無縁坂の上、山の手に位置する東京大学のイメージと共鳴しながら、岡田の「聖」的なイメージを強調する。

一方で岡田は「特待生を狙ふ勉強家ではな」く、「遊ぶ時間は極つて遊ぶ」学生であるとも語られ、さらには「競漕の選手」にもなっていたという。イギリスで誕生した「競漕」（ボートレース）は幕末に

日本に紹介されると、明治十一、二年頃からは東大生で熱心にボートを漕ぐ者が出始め、十八年頃には学生の一大イベントになっていた（10）。テクストには「競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでゐる」とあるが、詳細な散歩コースの説明とは対照的に、その足取りについては全く言及されない。また、岡田が散歩の途中に通る柳原は当時「引っ張り」という街娼の出た片側町であるが（11）、ここでの行動も「少し歩く」と記述されるのみである。「怪しからんこと」、すなわち猥褻な内容を含む『金瓶梅』を読んでいることも描写される岡田は、性的な行為を連想させる場所に出向いているにも拘わらず、その内実について、語り手は話そうとしない。勉学に結びつく『金瓶梅』については許容されていても、より露骨な性的イメージを喚起させる情報は隠蔽されているのだ。

すなわち、近代日本を担うべき存在である東大生の岡田は、語りによってその「聖」的なエリートとしての面が強調されている。その一方で彼は、競漕という近代の新しい事物に興味を持ち、積極的に取り入れる人間でもある。散歩の途中に立ち寄る眼鏡橋も、近代東京の新名所であり「閉ざされた封建都市から開かれた近代都市への転回」を象徴する空間だった（12）。こうした岡田像は「近代」の象徴として捉えられる。

それに対して、末造の職業は高利貸しである。酒井敏は高利貸しである末造を「これから始まる日本近代資本主義社会を支える「不属饗」という心性の体現者」と評し（13）、関谷由美子はその意味で「東大の学生岡田と同じく最も（開化的）な人物」であるとしている（14）。それでは空間に着目したとき、末造はどのような存在として浮かび上がるだろうか。

末造の住まいは「福地源一郎の邸宅の隣」に位置している。福地は「当時の言論界をリードする代表的知識人」、「時代の栄光を一身に浴びている人物」であった（15）。彼が当時邸宅を構えていた下谷茅町は、元は寛永寺の門前地であった（16）。先行研究の多くが末造を下町の庶民として捉えていることは先に述べた。しかし、西は江戸城、東は隅田川や江戸湾に挟まれた商人・職人たちの居住地が元来の「下町」であり、明治初期の「下町」は狭義には日本橋と神田の平地部分を指す地域であったことに留意する必要があろう（17）。

これらの点を踏まえれば、茅町は江戸の庶民的な「下町」としてではなく、福地に代表されるような「近代」的原理に拠って行動する人々を呼び寄せる空間として捉え直され、現在そこに住まう高利貸し

の末造もまた「近代」的な人物として位置づけられよう。末造はお玉とお常に、横浜みやげの蝙蝠傘を贈っているが、この行動も彼の「近代」性を象徴している。

それでは、同じ「近代」的人物である岡田が「聖」イメージを強調して語られるのに対して、末造はどのように描写されているのだろうか。「拾漆」章で、末造は妻のお常と喧嘩し、家を飛び出している。その後、彼が辿った道筋は以下のようなものであった。

家[8]→（切通の方へ抜ける）→天神町→五軒町→昌平橋[11]→眼鏡橋[12]の袂→柳原[13]→（川岸を引き返す）→淡路町→神保町→今川小路の手前→
俎橋の手前の広い町→俎橋[14]→飼鳥を売る店→
俎橋[15]→今川小路の茶漬屋

図で確認すると、末造は岡田よりも広範囲を歩いているが、二人の行動範囲には重なっている部分もあることが見て取れる。共通する地名としては、岡田が散歩コース（Ⅱ）で通った眼鏡橋と柳原が挙げられる。先述の通り、眼鏡橋は「近代」を象徴する場である。柳原には「川岸の柳の下に大きい傘を張って、其下で十二三の娘にかつぽれを踊らせてゐる男」がおり「周囲にはいつものやうに人が集まつて」賑わっている。踊りを見ていた末造は「印半纏を着た男」にスリに遭いかけたが、目ざとく振り返り阻止した。このような描写は、岡田の散歩時と同じ場所の記述であるにも拘らず、より「俗」的なイメージを感じさせる。

また、先に見たように岡田が「湯島天神の社内」を訪れるのに対し、末造が通るのは「天神町」である。ここでいう「天神町」は湯島天神町を指す。湯島梅園町にある湯島天神は、菅原道真を祀る学問の神社である。一方で、膝元の門前町として江戸時代から賑わった湯島天神町は芸者の花街として栄え、待合や置屋が多く並んでいた(18)。このような「聖」と「俗」とが並立する空間において語られる末造の行動には、「俗」イメージが付与されている。さらに、高台にある天神社内と階段下の天神町との対比は、坂の上の岡田に対する下の末造という、彼らの生活空間の構図を引き継いでいるとも言える。語りによって、岡田と末造は二項対立構造の中に回収されているのである。

柳原から川岸を引き返した末造は「淡路町から神保町へ」向かい、やがて「俎橋の手前の広い町」に出る。末造が経由したのは、明治になり上地され、人口が急激に増加していた地域である(19)。その先に辿り着いた町は「殆ど袋町のやう」であり、「医学生が虫様突起と名づけた狭い横町」が通ると描写される。市区改正以前の江戸の道筋をそのまま残した、「江戸の街並のおもかげ」を感じさせる空間である(20)。末造はここを通り過ぎた直後「飼鳥を売る店」を見つけ、「ふいと」お玉に買っていってやろうと思いつく。

江戸の風情を残した町を通りすがり、お玉を想起するという構図は、末造がお玉に抱くイメージを直接的に表している。「近代」の末造にとって、お玉は「前近代」の女なのである。同時に、末造が鳥籠の紅雀を「妾宅にかくまう愛玩物」としてのお玉と重ね合わせたのだとすれば(21)、曲がりくねった道で人を取り込む「袋町」という空間もまた、「前近代」のお玉を囲い込もうとする末造の意識の現れだと解釈できよう。

このように岡田と末造という二人の男は、決して相反する存在ではなく、ともに「近代」を象徴している。加えて言うならば、国に妻子がいるにも拘わらずお玉を騙して嫁に迎えようとし、井戸に身を投げそうになるまで精神的に追い詰めた「巡査」も「上からの開化の権威の庶民レヴェルにおける象徴」であり(22)、「近代」的人物と捉えられる。「女」としてのお玉に対する「男」たちは「近代」を象徴し、一定の社会的地位をもった力ある存在として位置づけることができるだろう。

岡田は「聖」、末造は「俗」という対立するイメージを背負いながら、同じ「近代」的人物として描かれる。そしてこの二人の男は、ともに散歩や外出の場面が詳細に語られる。彼らは「近代」を生きる「歩く」存在なのだ。

二　「前近代」の待つ女たち

それでは、このような男たちに対して、テクストにおける「女」はどのような存在なのだろうか。

末造の妻・お常は、妾のもとに通う夫の帰りを家で待つことしかできず、「あなた今までどこにゐましたの」「あなた今からどこへ行くのです」と詰る。お常が出かける様子は、「拾参」章で買い物に出かけ、途中にお玉を見かけた場面以外では描写されていない。「労働者として家事、子供の世話をして（家）に留まらざるを得ない」(23)お常は「待つ」女である。

彼女が子供の好物として思い起こすのが「藤村」の「田舎饅頭」である。藤村は「加賀前田家御用の菓子店」であり、羊羹や田舎饅頭で有名だった(24)。後に「弐拾」章でお玉が岡田に蛇退治のお礼の品を渡そうかと思案する際に、真っ先に思いついたのも藤村の田舎饅頭であったが、その直後「それでは余り智慧が無さ過ぎる。世間並の事、誰でもしさうな事になつてしまふ」と却下している。同じ女のお玉が否定する田舎饅頭を買い求めたことによって、お常はお玉よりも「智慧」のない、家という制度に囚われた存在として浮かび上がる。

さて、巡査に欺かれ父とともに西鳥越町に移り住んだお玉は、末造に目をつけられ、彼の妾となった。

高柳眞三によれば、妾は江戸時代から広く普及して行われた制度であったが、中期以降に奉公人のように妾を雇う「妾奉公」の形が取られるようになると、妾を「非常に賤しめる思想」が一般社会の中に徐々に強くなっていったという(25)。

時代が下り、明治三年十二月に頒布された新立綱領によって、妾の地位は二親等とされた。それまで奉公人のような形が取られたことから一転し、妾は妻と同じ立場として公認されたのである。その後明治十五年に施行された旧刑法では、妾の家族法上の身分は認めないこととされた。しかし、それ以後もしばらく内務省は戸籍上の取り扱いを従来通りにする態度をとった(26)。よってテクスト当時は「近代以前の一夫多妻的状況の追認とその否定が頻繁に行われた、独自の期間」だったと言える(27)。妻という揺らぎない立場にあるお常に対して、妾のお玉は極めて不安定な立場に置かれているのである。

末造はお玉を住まわせるにあたって、二つの候補地を立てた。一つは「池の端で、自分の住まつてゐる福地源一郎の邸宅の隣と、その頃名高かつた蕎麦屋の蓮玉庵との真ん中位の処で、池の西南の隅から少し蓮玉庵の方へ寄つた、往来から少し引つ込めて立てた家」、もう一つは「無縁坂の中程にある小家」である。末造は「陰気なやうだが、学生が散歩に出て通る位より外に、人の余り通らない処になつてゐる無縁坂の家の方が人目につきにくいと考え、お玉はこちらに隠し置かれることになった。もう一方の「見晴しがあ」り「人の目に着きさう」な「開け広げたやうな場所」である前者の家には、お玉の父が住むことになった。お玉の運命は、結果的に無縁坂の家をあてがわれたことによって揺り動かされることになる。

無縁坂は、龍岡町の北側に沿って不忍池方向へ下

る坂である。岡田の住む上条は無縁坂の上、末造とお常の住まいは無縁坂の下に位置する。坂の南側には広大な「岩崎の邸」がある。対して北側には「けちな家が軒を並べて」おり、「小さいしもた屋」や「手職をする男なんぞの住ひ」、「荒物屋に煙草屋位しかな」い風景の中で、「中に往来の人の目に附く」のが「裁縫を教へてゐる女の家」、その隣の「格子戸を綺麗に拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石を塗り込んだ上へ、折々夕方に通つて見ると、打水のしてある家」がお玉の住まいである。

テクスト内には全く描写されていないが、実際の無縁坂北側には当時「浄土宗専修山講安寺」があり、現存している。寺があれば、訪れる参拝者らの存在が想起される。テクストでは語られないことによって、「けちな家」の並ぶ中に「いつも際立つてひつそりしてゐる」お玉の家に焦点が当てられ、人通りの少ない無縁坂のイメージがより強固に浮かび上がってくる。末造は人目につかないようお玉を無縁坂に住まわせ、のちに岡田、「僕」、石原は人目につかないよう、不忍池で殺した雁を運ぶ道に無縁坂を選んだ。「寂しい」無縁坂を通して、お玉と死んだ雁は重ね合わされる。

お玉の家を描写する際に繰り返し語られる「格子窓」は「遊郭の張店風景」を想起させ、同時に「万年青の鉢」との取り合わせは「妾宅の雰囲気をただよわせ」る(28)。さらにその光景は、末造がお玉に贈った鳥籠へとイメージを連ねる。先述したように、末造がお玉に紅雀を買ったのは、江戸の町並みのおもかげが残る地域を通った直後である。通行人を取り込むような「前近代」的な空間でお玉を思い出し、紅雀を買い求めた末造は、鳥を籠に飼うようにお玉を格子窓の家に囲ったのである。そもそも末造がお玉を見つけたのは、「狭い路地」で「稽古三味線の音」を耳にしたことがきっかけであった。お玉には「前近代」の弱い女性のイメージが重ねられているのである。

さて、「雁」の物語世界にあって、中心に置かれているのが不忍池である。徳川幕府は、京都の比叡山・琵琶湖・竹生島という構図を模して上野一帯を整備した。寛永二(一六二五)年には上野に寛永寺を創建し、麓の不忍池を琵琶湖に相当させるため、中島を築いた。江戸時代前期には不忍池は蓮の名所として定着し、人々が鑑賞に訪れるようになる。江戸中期以降、池の中に土手が築かれると、そこには出合茶屋が並び男女の出会いの場となった。こうして大衆化していったものの、寛永寺という宗教的権威や

蓮の名所としての趣は失われることはなく、不忍池と蓮とは「いかにも江戸的な土地と景物の組み合わせ」として認識され続けた(29)。不忍池は、いわば「聖」と「俗」とが共存する空間として存在していたのである。

しかし慶応四(一八六八)年五月に上野戦争が起こると、不忍池周辺は激しい戦いの舞台となった。血塗られた負のイメージを振り払うように、明治時代になると一帯は「上野公園」として整備、開発され始める。明治十年の内国勧業博覧会を始めとした催しが行われ、文化施設の建設が進み、明治十七年には不忍池周辺が競馬場にもなっている。明治二十年代にも蓮見は健在であったというが、池をはじめ、一帯の雰囲気は大きく様変わりしていたのである(30)。

このように、明治になると不忍池や上野という空間には文明開化以後の近代的で新しい事物が次々と押し寄せ、江戸的な要素を上塗りしていったと言える。服部康喜は上野公園を「〈開化〉=技術革新の象徴の地」、「擬西洋」の空間であるとしているが(31)、明治十三年というテクスト内の時間を考えれば「前近代」とそこに押し寄せる「近代」をともに兼ね備えた、両義的な空間と捉えるべきだろう。「雁」においては、「前近代」の弱い女性であったお玉が、男性を通して「近代」に接することになった。巡査と末造に欺かれたことは「前近代」への「近代」による侵犯として捉えられよう。上野の地が象徴するごとく、お玉もまた、「近代」に侵される「前近代」の存在だった。

また、不忍池にはいくつかの伝説がある。明治四十年に刊行された『東京案内　下巻』(32)には、不忍池をめぐる怪談が紹介されている。池の東西の岸に男女がおり、男は橋を渡り娘のもとに通ったが、嫉妬した娘の継母が橋を撤去した。男はこれに気づかず池に落ちて溺れ死に、娘も後を追って入水した、というものである。他にも、おそらく江戸期の創作と考えられる御伽草子の『しのばずが池物語』は、自分ではない男を選んだ「蓮の前」を長者が池に沈め、彼女は池の蓮になった、という話を伝える(33)。このように、不忍池は若い男女の悲恋の、特に女性側に視点を置いた物語が言い伝えられる空間だった。お玉の恋の行方は、不忍池という場所によって予言されていたのである。

しかし、岡田との出会いが「前近代」の弱い女性だったお玉の立ち位置に変化を及ぼすことになる。妾となったお玉は、家で末造を待つのみの存在であ

った。また「視線を投げかける時、決まって」「ある場所に居り続け」る、家の中から窓越しに岡田を「まなざす」女でもあった(34)。そのような以前の姿に対して、岡田と知り合って後のお玉は、末造の留守に岡田と邂逅しようとし、自ら同朋町の髪結の店まで出かけている。岡田と最後に顔を合わせた日、不忍池に向かう彼を待ち受けたのは「家の前に」「立つてゐた」お玉であり、岡田たちが池から石原の下宿に向かう時、彼女はさらに「自分の家よりは二三軒先へ出迎へてゐた」のである。男を待つのみの、受動的で弱い存在であった「前近代」のお玉は、岡田との出会いを通して自らの意志で立ち上がり、歩き出す女となった。彼女の自我の目覚めを予感させながら、物語は終わりを迎える。妾という不安定な立場にあったお玉は、それゆえに、自らの生き方を変革する可能性を自身の中に秘めていたのである。

では、お玉の父とはどのような存在であったのだろうか。引っ越してからの父については「吹抜亭」に出かける様子が描写されている。吹抜亭は当時数奇屋町にあった寄席である。寄席は江戸の庶民の娯楽であり、明治の世にも人々に親しみのある場所であった(35)。このように、お玉の父は外出して娯楽を楽しんでいたが、その先でも「今頃留守へ娘が来て、まごまごしてゐはしないか」と想像したり、女を見かければ「一刹那の間お玉だと思つた」りしており、いつもお玉を気にかけている。

同時に、父は家で娘の訪問を待つ存在でもある。家から「上野の山で鴉が騒ぎ出して、中島の弁天の森や、蓮の花の咲いた池の上に、次第に夕靄が漂つて来る」のを見ているとき、彼はお玉のことを考えている。「近代」が押し寄せる上野に残る、「前近代」的な光景の中に、待つ父はお玉を見出しているのである。

このように、お玉の父は「歩」いて出かける人物でありつつ「待つ」人物としても描かれており、その興味は「前近代」的な方面に向いていると言える。先に検討した岡田や末造、巡査にとってのお玉は性愛の対象となり得る存在であり、この意味で父を「男」の枠組みに当てはめることはできない。「近代」の「歩く」「男」と、「前近代」の「待つ」「女」の二項対立の外に、お玉の父は存在している。

おわりに

これまで「雁」は、エリートの岡田や「僕」と、下町に生きるお玉や末造を二項対立的に捉えた読み

が多くされてきた。しかし、登場人物を取り巻くより具体的な空間のありように着目してテクストを検討することで、「近代の歩く男」と「前近代の待つ女」という新たな対立構造を見出せるとともに、その構造から弾かれる者がいることも明らかになった。

岡田との恋は実らなかったお玉であるが、彼女は岡田との出会いを通して、家の中で待つ女から、自身の欲望のために歩き出す女へと変貌を遂げた。「雁」は、明治期の一人の女が、「近代」の男と出会うことで「前近代」的世界から抜け出そうとし始め、自立へ向かっていくテクストとして読むことができるのである。

注

（1）千田洋幸「転移する語り―『雁』―」、「立教大学日本文学」六十四号、一九九〇年七月。

（2）前田愛「幻影の町③森鷗外『雁』」、「本の窓」四巻一号、一九八一年三月。

（3）瀧本和成「森鷗外『雁』の世界」、「立命館文学」五四〇巻、一九九五年七月。

（4）山崎一穎「豊熟の光と影（三）『雁』を読む」、「NHK文化セミナー・明治文学をよむ　森鷗外～その文学の時空間」、一九九七年四月。

（5）長谷川明子「森鷗外『雁』―開化期に生きる人々―」、「繍」十三号、二〇〇一年三月。

（6）例えば『日本近代文学大系　第十一巻　森鷗外集Ⅰ』（角川書店、一九七四年九月）や『鷗外近代小説集第六巻』（岩波書店、二〇一二年十月）の巻末には「雁」の「参考地図」が掲載されている。なお、本文の引用は『鷗外近代小説集　第六巻』に拠った。

（7）テクスト内の具体的な地名を含む空間に着目した分析には、一定の意義がある。例えば、テクストには「眼鏡橋」（目金橋とも表記される。旧万世橋の俗称）と「昌平橋」という二つの橋が登場する。大塚美保と酒井敏は、前掲『鷗外近代小説集　第六巻』の解題において、昌平橋は明治六年に洪水で流され、その後明治三十二年に再架設されたものであり、テクスト当時の明治十三年には実在しなかったと述べ、「厳密に事実を探索する立場からは矛盾と映る事実関係の錯誤」だとしている。それは「「僕」が持つ当時への郷愁、過ぎ去った時間の懐かしさに読者を共鳴させる、鷗外の効果的な演出」であり、すなわちテクスト空間が事実を反映したものではないとの指摘である。ここで言及されている昌平橋は、以前には「一口橋」や「相生橋」と称された橋のことである。元禄四（一六九一）年の湯島聖堂建設に伴い、孔子の故郷に由来して「昌平橋」に改められた。その後、明治になり再び相生橋とされたが、明治六年の大洪水で落下した。この際、新たに眼鏡橋が建設されたため一旦撤去され、明治三十年代になって再び「昌平橋」として架設されたのである。ところが、現在の万世橋も同じく「昌平橋」と称されていた時期があった。徳川将軍も利用した「文久橋」は、明治十年に再架設された際に「昌平橋」とされた。その後当時の万世橋（眼鏡橋）が撤去されたのと前後して、明治三十九年に「万世橋」と改称した。すなわち、明治十三年における「昌平橋」は今の万世橋を指し、実在したのである（以上、東京市役所市史編纂係編『東京案内　上巻』（裳華房、一九〇七年四月、復刻版、批評社、一九八六年十月）、中村薫『神田文化史』（秀峰閣、一九三五年八月）参照）。大塚と酒井の指摘とは異なり、テクストは現実の空間を踏まえたものであると言える。

（8）東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史　通史一』、東京大学出版会、一九八四年三月。

（9）エドワード・サイデンステッカー、安西徹雄訳『東京　下町山の手』、TBSブリタニカ、一九八六年三月。

（10）湯本豪一『図説　明治事物起源事典』、柏書房、一九九六年十一月。

（11）槌田満文編『東京文学地名辞典』、東京堂出版、一九七八年二月。

（12）小木新造・前田愛編『明治大正図誌　第一巻　東京一』、筑摩書房、一九七八年二月。

（13）酒井敏「『雁』論―末造と岡田の造形をめぐって」、「早稲田大学大学院文学研究科紀要　別冊」十二号、一九八六年一月。

（14）関谷由美子「『雁』の叙法―〈疎遠〉な二つの物語」、「叙説」十三巻、一九九六年八月。

（15）上田渡「森鷗外『雁』における「僕」と岡田の物語―福地源一郎を理想化する男性原理的構造―」、國學院大學大学院長谷川泉ゼミナール編『鷗外・康成・鱒二―長谷川泉ゼミナール論文集』（國學院大學日本文学第九（阿部正路）研究室、一九九四年十月）所収。

（16）東京市役所市史編纂係編『東京案内　下巻』、裳華房、一九〇七年四月、復刻版、批評社、一九八六年十月。

（17）（9）に同じ。

（18）東京都文京区教育委員会社会教育課編『ぶんきょうの町名由来』、文京区教育委員会、一九八一年三月。

(19)『千代田区史　中巻』、千代田区役所、一九六〇年三月。
(20)(2)に同じ。
(21)千葉俊二「「窓の女」考―『雁』をめぐって―」、「森鷗外研究」二号、一九八八年五月。
(22)小泉浩一郎「『雁』論―現実認識の錯誤をめぐり―」、「東海大学紀要(文学部)」三十二巻、一九八〇年二月。
(23)河田恵「森鷗外『雁』論―深層の物語における末造の支配性と語り手「僕」―」、「国文」一〇一号、二〇〇四年七月。
(24)大塚美保・酒井敏「注釈」、前掲『鷗外近代小説集第六巻』所収。
(25)高柳眞三『明治初年に於ける家族制度改革の一研究―妾の廃止―』、日本法理研究會、一九四一年二月。
(26)浅古弘「明治前期における妾の地位」、「法律時報」四十七巻十三号、一九七五年十一月。
(27)目野由希「お玉の物語―森鷗外「雁」―」、「國語と國文学」一〇三三号、二〇〇九年十二月。
(28)(2)に同じ。
(29)鈴木健一『不忍池ものがたり―江戸から東京へ』、岩波書店、二〇一八年十月。
(30)(29)に同じ。
(31)服部康喜「まなざしと時―『雁』の視界―」、「近代文学論集」十五巻、一九八九年十一月。
(32)(16)に同じ。
(33)(30)に同じ。
(34)(31)に同じ。
(35)(12)によれば明治十三年の寄席の聴衆は約二六〇万人で、歌舞伎の観客動員数約四十三万人と比べてもその人気の高さが伺われる。

付記
参考地図の作成にあたっては、横浜国立大学大学院教育学研究科教育実践専攻教育デザインコース教育学領域所属の李菲さんに御助力いただきました。記して感謝申し上げます。

【参考地図】
「東京実測全図」
(内務省地理局、
明治 19－21 年)
より

―――――― 岡田の散歩コース（Ⅰ）-A
- - - - - - - - - - （Ⅰ）-B
…… （Ⅱ）
―・―・―・― 未造の通ったコース

①東京大学　②上条　③無縁坂　④お玉の家（推定）　⑤未造の家（推定）
⑥不忍池　⑦岩崎の邸　⑧お玉の父の家（推定）　⑨蓮玉庵　⑩臭橘寺
⑪湯島天神　⑫神田明神　⑬眼鏡橋　⑭昌平橋　⑮柳原　⑯俎橋